研究報告

コース・メジャンの春景色を探しに リュック・フェラーリの映画と音楽をめぐる一試論

LOOKING FOR THE SPRING LANDSCAPE IN CAUSSE MÉJEAN -AN APPROACH TO LUC FERRARI'S FILMS AND MUSIC-

佐藤亜矢子 Ayako SATO 東京藝術大学 Tokyo University of the Arts

概要

リュック・フェラーリの多岐に亘る創作の中で、1972~73年に制作された《ほとんど何もないあるいは生きる欲望》は、作曲家の表現手段としては稀であるドキュメンタリー映画の形態を採る。他にも彼は 60~70年代に幾つかの映画作品を手掛けたが、代表的な電子音響音楽作品《ほとんど何もない第一番》に次いで《ほとんど何もない》と命名されたこの映画は、フェラーリの活動全体像を検証する為の要点の一つと考えられる。二部構成の第一部《コース・メジャン》とその映画音楽となった《春景色のための直感的小交響曲》を題材に、彼の映画と音楽、その繋がりについて考察する。

One can find that there are some film works included in Luc Ferrari's broad-ranging catalog, despite the fact that he was primarily a composer. I believe that especially "Presque rien ou le désire de vivre" (1972-73), a documentary film, is important work as the second "Presque rien" after "Presque rien no.1" (1967-70), his masterpiece. In this paper, I consider the relationship between his film and music by focusing on "Le Causse Méjean", the first part of this film, and "Petite symphonie intuitive pour un paysage de printemps" (1973-74), its theme music.

1. はじめに

2014 年秋、東京と関西において、リュック・フェラーリ Luc Ferrari (1929-2005) が監督した、あるいは彼の楽曲上演を撮影した映画が、日本語字幕付で日本初上映されるイベントが開催された。(図 1)¹

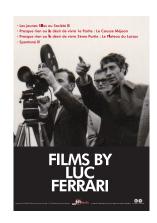




図 1. 2014 年 10 月に開催されたイベントのフライヤー (一部)

彼は承知の通り作曲家だが、僅かな期間ではあれど映画作家としての側面も見せる。その足跡が日本で紹介されたのは今回が初でないとは言え、無論作曲作品の上演と比較すればその機会は稀有であり、音楽家として彼が残した所産に感興を覚える我々によってそれは喜びそして驚きと共に迎えられた。中でも注目したいのは、南西ドイツ放送委嘱により制作されたドキュメンタリー映画《ほとんど何もないあるいは生きる欲望 Presque rien ou le désire de vivre》(1972-73)である。この映画を議論の対象に定めたい理由はその作品名にある。彼は30年以上に亘って「ほとんど何もない Presque rien」という名を冠した楽曲を6作品残し、特に1967-70年に作曲された電子音響音楽作品《ほとんど何もない第一番あるいは海岸の夜明け Presque rien no.1 ou Le lever du jour au bord de la mer》2は彼の代表作殊に彼が提唱する「逸話

 ^{1 2014}年10月1日プレスク・リヤン協会日本支局ブログ http://association-presquerien.hatenablog.com/entry/2014/10/01/ 174934 2014年10月1日アクセス

² 筆者はこの楽曲についての研究報告を、2013 年度修士論文 「リュック・フェラーリ、逸脱する電子音響音楽《ほとんど何

的音楽 musique anecdotique」3のとして知られる。そして筆者はそれら6つの楽曲とこの映画作品《生きる欲望》を含めた《ほとんど何もない》全7作品を彼の創作における重要な一つの作品群であると仮定し、調査を始めた矢先なのである。よって作品群の意義を解明する為の端緒をこの映画作品及び作中の音楽から導き出すことが研究における最終的な目的となるが、本稿においては先ず第一歩の試みとして、この映画の第一部《コース・メジャン Le Causse Méjean》を主に取り上げたい。作中に用いられる音楽は《春景色のための直感的小交響曲Petite symphonie intuitive pour un paysage de printemps》(1973-74)という作品名で発表されたフェラーリ作曲の電子音響音楽作品である。映画とは無関係に別途音源化されたこの楽曲が映画と如何なる相関性を持つのかについても観察する。

2. フェラーリと映画

作曲家としての仕事に身を投じる最中、フェラーリは 1962-63 年にジャック・ブリソ Jacque Brissot と共同名義で映画《巡礼者たち Les Pèlerins》を監督する。これを発端に 1972-73 年《ほとんど何もないあるいは生きる欲望》まで計 5 作品の映画制作に携わることとなる。うち 3 作品がフランスでなくドイツの放送局による委嘱制作である事実も興味深い。同時期に彼は作曲家として映画に携わることも多かった。1960 年にブリソ監督短編映画の音楽を担当して以降 67 年までと、1977 年から82 年までの間に、計 16 作品の映画音楽を発表する。

様々な表現形態に関心を寄せては、彼なりの手法で咀嚼し消化していったフェラーリが、映画の仕事に従事することとなるのは至極自然な成り行きだったことだろう。彼は映像に熱意を持ち、実験映画を手掛けていた映画監督達と親しくしていたという[2]。映画と映画音楽に携わった時期は、半世紀に亘る彼の創作活動の初期~中期に位置付けられる。スライドと音楽による作品や演劇的要素を含むシアター・ピースといった、視覚的要素の色濃い作品を幾つも発表していた時期と重複するのも偶然ではない筈だ。映画音楽 16 作品目となった 1982年《クロノポリス Chronopolis》(監督:ピョートル・カムラー Piotr Kamler)の仕事を最後に、彼の映画に関す

3. 映画《ほとんど何もないあるいは生きる欲望》

3.1. もう一つの《ほとんど何もない》

フェラーリの《ほとんど何もない》作品群最初の作品《第一番》と《ほとんど何もない第二番「こうして夜は私の多重頭脳の中で続いて行く」Presque rien no 2."Ainsi continue la nuit dans ma tête multiple"》(1977) との間の時期に作られたこの映画については、作品目録4にその情報や短い解説を確認することはできても、作品そのものが上映される機会はなく、同じ題名が冠せられている《第一番》をめぐって彼本人あるいは第三者の言及した形跡の多さと比較すれば、謎めいた存在とも言える。そ

るあらゆる活動は姿を消す。自らの創作手段として映画 という形態を選択すること自体は遡って 1973 年の時点 で既に放棄していたことになる。委嘱制作も多かった 彼の活動を鑑みれば、映画関連作品創作の放棄が全面的 に彼の意向によると安易に断定しかねるとはいえ、ぷっ つりとその糸が途切れている事実は着目すべきである。 映画という仕組みを用いて実践する創作の手段に対し、 以前のように肯定的な姿勢を保持できなくなるという 意識の変化が彼の内に起こっていたことが推測できる。 これは、単純に視覚表現全般に対する関心が失せたとい う問題ではない実際 1990-2000 年代には映像を伴うイ ンスタレーションを創作している。トータル・セリエリ ズム、ミュジック・コンクレート、映画音楽、電子音響 音楽、シアター・ピース、映画制作、インスタレーショ ンと、彼の表現方法における興味の矛先は常々他方向へ 向き、都度焦点をずらし続けていた。そのような中で彼 が映画に関わらなくなったのは何故か。筆者はこの要 因をヘールシュピール(ラジオ・ドラマ)にあると推測 する。映画の如くイメージや物語を描く手段として、聴 覚的刺激のみによって表現するそれに彼の興味が移っ た、あるいはその仕事の中に、映画以上に自らの思う像 を描ける可能性を発見したと考えてみたい。1971年南 西ドイツ放送のラジオの為に制作された《肖像=戯れ Portrait-Spiel》は 80 分の長編テープ作品であり、これ が彼にとって最初のヘールシュピールとされる。それか ら 2000 年代までラジオの為の創作は継続された。

もない第一番》を中心に」として東京藝術大学に提出した。また、先端芸術音楽創作学会第 15 回 (2013)、第 19 回 (2014) 研究会にて経過報告を実施している。

³ 確固とした音楽様式ではないので定義は難しいが、渡辺 [1] によると「録音した音を一つの抽象化された素材として扱う動きが主流であった」黎明期から60年代のミュジック・コンクレートに抗い、フェラーリが手掛け始めた「録音された音響素材に現実の言葉や実世界の具象的な音などといった既に意味作用のあるものを積極的に採用」した「『現実的』で『社会的』な音が含まれた音楽」に対して、彼自ら命名したのが「逸話的音楽」であり、最初の作品は《異型接合体 Hétérozygote》(1964)とされる。

⁴ フェラーリの作品目録は、以下の資料に見られる。(1) 彼のインタビュー等を集めた書籍 Jacqueline Caux. Presque rien avec Luc Ferrari. Nice: Main d'œuvre, 2002. これは和訳、英訳本も出版されており、本稿における作品名和文表記はこの和訳本 [2] に依拠した。(2) 彼の死後に設立されたプレスク・リヤン協会 Association Presque Rien の公式ウェブサイト http://www.lucferrari.org/、(3) ダニエル・テルッジ Daniel Teruggi ら数名によるテクストや、フェラーリ夫人であるブリュンヒルド・メイヤー・フェラーリ Brunhild Meyer-Ferrari へのインタビュー等を所載したエブリヌ・ガイユー Evelyne Gayou による編書 [3]、(4) プレスク・リヤン協会が制作した冊子

表 1. リュック・フェラーリの監督映画作品一覧

年	作品名	制作	共同監督
	(各国はその偉人を祭る Chaque pays fête son grand homme ※作品目録にはないが、副監督を務めたとされる)		
1962-63	巡礼者たち Les Pèlerins	GRM	ジャック・ブリソJacques Brissot
1965-66	大いなるリハーサル Les Grandes Répétitions	ORTF	ジェラール・パトリスGérard Patris
1967	少女たちあるいはソシエテⅢ Les jeunes filles ou SociétéⅢ	NDR	
1972	シェーンベルクを知っていますか? Kennen Sie Schönberg?	WDR	
1972-73	ほとんど何もないあるいは生きる欲望 Presque rien ou le désire de vivre	SWF	

参考:ジャクリーヌ・コー『リュック・フェラーリとほとんど何もない インタヴュー&リュック・フェラーリ のテクストと想像上の自伝』椎名亮輔 訳、東京:現代思潮新社、2006年

の上、時系列的には二作目の《ほとんど何もない》であるにも関わらず、4年後に作曲した三作目である筈の電子音響音楽作品を《第二番》と名付けているまるでこの映画が存在しなかったかのように三作目を《第二番》とした彼の意図については、今後、思慮深く取り扱ってゆく必要があろう。この映画が放送局委嘱であることから、作品が容易に日の目を見ることはない事情があるという予測はついた。フランス国内では一度プライベートな場で上映を行ったのみであるといい⁵、昨秋の日本上映が如何に貴重な機会だったかが窺える。

現在は SWR に統合されたかつての南西ドイツ放送 SWF よりフェラーリに TV 放映の為の映画制作の委嘱があり、彼はその舞台としてメジャン、ラルザックという南仏の地を選択した⁶。そして当時起きていた農業に関わる社会問題を主眼に置いたそのドキュメンタリー映画に《ほとんど何もないあるいは生きる欲望》と命名する。二部構成から成るこの 16 ミリ映画の脚本、監督、音楽をフェラーリが手掛けた。音楽はブールジュ実験音楽グループ Groupe de musique expérimental de Bourges (GMEB) のスタジオに招かれて作曲を行い⁷、GMEB が

この映画の共同製作としてクレジットされている。映 画の主人公は、活動家の男性ロルフと写真家の女性エリ カ⁸ のカップルで、ドイツ語とフランス語を操るエリカ は、フランス語を喋る農民たちとドイツ語を喋るロルフ の間に立ち通訳としての役割も担う。社会的、政治的な 問題を抱える農地を取材に訪れ、答えを導き出そうとす る二人の姿を撮影しているが、終幕に明確な結論を提示 することはなく、フェラーリが何らかの主張を仄めかす こともなく、ただ彼らの訪れた土地の人々の生活を慎重 に見つめ、聞き、その情景をまるで剥き出しのままに鑑 賞者に投げかける体裁をとる。一つの場所でその環境を 観察し、俳優たちにさえほとんど何も起こらないこの映 画は、音楽作品の《ほとんど何もない》と同じ理念の元 で構築されたという9。何も起こらない中で様々な人物 の思惑や生き様が交錯する有様には「多くがある」、そ してドキュメンタリー映画とて勿論多くの演出や編集が 行われているが、《生きる欲望》で我々が得る感触は、緻 密な音響編集が為され、実際には「多くがあり」ながら もまるで作曲家の介入が無いような素振りを見せる《第 一番》を彷彿とさせる。

^{5 2015}年2月13日に受信したフェラーリ夫人からのメールによる。彼女は2014年10月28日同志社大学(京都)での上映イベントでも舞台挨拶の際に、この映画を「40年ぶりに大画面で鑑賞する」と語っていた。

⁶ SWF からの指示や依頼ではなく、彼自身で映画の議題や舞台となる場所を選んだという。前掲メールによる。

⁷ 前掲メールによる。

⁸ フェラーリが音楽を手掛けた映画《アベス広場 Place des Abbesses》(1977)の監督エリカ・マグダリンスキ Erika Magdalinski。

⁹ 前掲メールによる。

3.2. 《コース・メジャン》

第一部《コース・メジャン》は南仏の僻村メジャンを 舞台とした 55 分程の作品である。「コース」とは「南仏 の石灰質の不毛な台地のこと」¹⁰であり、1973年4月に この村を訪れたロルフとエリカは、荒涼たる地で牧畜や 農耕によって生計を立てる住民たちと会話し、共に食事 をとり、1週間彼らの家に寝泊まりする。限界集落にお いて、あるいはそこで運用される集団農園のシステムに おいて、彼らが直面する問題に対して議論を交わし、そ して終局には次なる土地、映画第二部の舞台となるラル ザック高原へ向かう為にメジャンを後にする。冒頭のク レジットで出演者が紹介された後「彼らはある農家に泊 まることとなった/彼らはルポタージュを行っている/ 農民たちに問いかけて/考える」というドイツ語のイン サート・タイトルがイントロダクションとして表示され るが、以降は登場人物に全てを委ねられ、二人と農民た ち、あるいは集団農園 GAEC のアドバイザーであるガ リエールとの会話のみで進行し、状況を解説する第三者 の存在はない。二人が熟議を交わすのはほぼ決まってメ ジャンの荒地で、その背後にはまさに「ほとんど何もな い」寒々しい景色が広がる。(図 2)11



図 2. 《コース・メジャン》の一場面 (エリカとロルフ)

音楽がどのように差し込まれているかを軸に全体の構成をまとめたものが表2である。なお、本作で用いられている音楽は次章で考察する《春景色のための直感的小交響曲》のみである。

表を見ると、55分程の作中、30分間以上の場面に音楽が伴うことが分かる。更に、音楽が導入される箇所と

退く箇所に、ある種の規則性を確認することができた。 (1)トラクターを運転する男性の姿か女性の話し声がト リガーとなって、音楽がフルート¹²の音から現れる。(2) 音楽が場を退くのは必ずインタビューが始まる箇所であ る。以上の2点である。(2)に関しては、会話そのもの にクローズアップする為、あるいはそこに余計な説明的 要素を付加させない為にインタビュー場面から音楽を外 すという現実的な事由が窺える。しかし 32 分 20 秒辺 りから始まる羊飼いの男性アヴェスクへのインタビュー 場面に限っては、羊の鳴き声と共に音楽が寄り添う。こ こで注目したいのが 33 分 57 秒のアヴェスクの一言で ある。毎日羊の世話をする孤独な彼は余暇にフルートを 吹くと言う。要するにこの音楽のフルートは、アヴェス クの象徴と言える。これについては後に述べることとな る。41 分 30 秒のトラクターの場面で (1) に反して音楽 がマスキングされるという例外はあるにせよ、多少量さ れた特例を含みつつも一定の法則に従って出来事が循環 する構成となっている。

4. コース・メジャンの春景色

4.1. 電子音響音楽《春景色のための直感的小交響曲》

エコーの効いたフルートの音で開始されるこの楽曲 は、録音音響を編集して構築された電子音響音楽作品で ある。フルート・電子音・具体音と大雑把に分ければ3 種の音響要素から構成されている。フルートの音は、25 分余りの楽曲中、冒頭から20分過ぎまで常時響き続け、 23分30秒辺りまで断片的にその音を確認でき、楽曲の メインパートを担う。電子音は、時として環境音と判別 不能である程の細やかな音響が多く、映画の中でもそれ が映像に付随する環境音なのか楽曲中の電子音なのか、 その境界線が非常に曖昧で音楽の所在を見失いがちにな る。高音の唸りは虫や鳥の鳴き声にも聞こえ、一定の速 度で鳴るカタカタという音響はトラクターの走行音と一 体化する。終盤、徐々に姿を現す低音のドローンも、主 人公の二人が車で去るラストシーンまで前面に押し出さ れることはない。具体音とは、人々の声、物音、動物の 鳴き声などで、これらはメジャンで録音された環境音で ある。人々の声は明らかに《コース・メジャン》の登場 人物達の会話であり、はっきりと言葉を聞き取ることが できる。

40年もの間上映機会を逸してきた映画と対照的に、この楽曲は複数のディスク¹³に収録され、我々は容易に

^{10 2014} 年 10 月 23 日プレスク・リヤン協会日本支局ブログ http://association-presquerien.hatenablog.com/entry/2014/10/23/ 093819 2014 年 10 月 28 日アクセス

^{11 2014} 年 10 月 23 日プレスク・リヤン協会日本支局ブログ http://association-presquerien.hatenablog.com/entry/2014/10/23/ 093819 2015 年 2 月 23 日アクセス

¹² コンサート・フルートとの誤解を防ぐ為、映画中の日本語字幕 に従って「笛」とするのが好ましいが、本稿ではこの表記を用 いている。

^{13 1}件の特例を含む以下の 3 点がある。(1)Luc Ferrari. "Acousmatrix – history of electronic music 3". BVHaast: BVH 9009 (CD), track 1. Released 1990. (2)Luc Ferrari. "l'œuvre électronique".

表 2. 《ほとんど何もないあるいは生きる欲望 第一部:コース・メジャン》構成表

分 秒	場面	音楽
0'00"	黒画面→トラクターが横切る様子がフェイドイン	フルート
0'18"	クレジット「監督 リュック・フェラーリ」	+電子音(虫か鳥の声のような)
3'55″	青いシャツの農家男性へのインタビュー	フェイドアウト
	インタビュー/エリカとロルフ二人の議論	なし
9'55"	エリカ「この風景はとても美しいですね」	フルート+微かに電子音
11'55″	ミシェル・ガリベールへのインタビュー	フェイドアウト
	インタビュー	なし
16'55"	GAECの農民たちと夕食	
25'45"	食事中 農家女性「私たちの社会主義は政党のとは全く関係ない」	フルート+微かに電子音
33'57"	~~~羊飼いのアヴェスク「笛を吹くんです」~~~	
41'30"	トラクターを運転する男性	トラクターの走行音でマスキング
41'45″	草原を歩くロルフ	走行音と重なって電子音
42'30"	ガルー家へのインタビュー	鳥の鳴き声と電子音が混じり合い判別不能状態へ
	インタビュー	なし
47'00"	トラクターを運転する男性のアップ	フルート+微かに電子音
49'35"	懐中電灯を頼りに歩くエリカとロルフ	フルート消え、高音の電子音(虫か鳥の声のような)
51'55″	農民たちとの別れ	+フルート&引き延ばされる低音
53'20"	ラルザックの予告	低音ドローンが強調されてゆく
55'00″	終わり	

入手し鑑賞することができる。そのライナーノーツには、プレスク・リヤン協会公式ウェブサイトに掲載された文章と同じ解説文が寄せられている。そこではこの楽曲を「『風景の音楽』と呼ばれたシリーズの一部」¹⁴であると言い、《ほとんど何もない第一番》との関連性を明記している。彼が訪れた土地の厳しさや美しさが克明に描写され、険しい道程を通過した後に素晴らしい夕日に出会った様子が語られる。そして、それに続いて「コース・メジャン」という地名がしかと記されているのである。件の映画には一言も触れていないものの、この地名を見れば歴然である。しかし映画そのものがあまりに陰に隠れ過ぎていた為に、これまで《コース・メジャン》と《春景色》との関連について詳しく言及した例はほとんど無かった。

4.2. 笛を吹く羊飼い

解説文の終盤で、この楽曲の軸となる主題が明らかに される。コース・メジャンでフェラーリは羊飼い達に出 会うことになる。その一人が零した「私は退屈すること はありません。私は風景に耳を傾けています。時々私 はフルートを吹き、そして私に語りかけてくるエコー に耳を傾けるのです」15という言葉、これは映画の中で アヴェスクが語った内容そのものである。フェラーリ は「彼のことを考えながら、私は自分の音楽にフルー トとそのエコーを用い」¹⁶、そしてこの楽曲を完成させ た。映画《コース・メジャン》で唯一聞かれるこの楽曲 は、瑣末なバック・グラウンド・ミュージックとしての 映画音楽ではない。この電子音響音楽は、メジャンの地 で録音した環境音を用いてこの映画の為に作曲された音 楽¹⁷ であり、フェラーリがメジャンに赴くことがなけれ ば、つまり映画が制作されることがなければ存在し得な かった。作品目録でこの楽曲に「映画音楽」という肩書 きは無く、単に「ステレオ・テープ」作品とされている

INA-GRM: Ina G 6018 (CD), track 3. Released 2009. (3)Luc Ferrari. "Contes Sentimentaux". shiiin: shiiin 8 (CD), track 1. Released 2013. (3) は 1989 年に《感傷的な物語第一番 Conte Sentimental no.1》として回路の詩神協会 La Muse en Circuit で制作された同名作品だが、彼の別楽曲と物語を語るフェラーリ夫妻の声とがミックスされたヘールシュピールとして音楽が開始し、電子音響音楽である《春景色》は途中から挿入され、元曲から派生した別作品として捉えられる。

¹⁴ Luc Ferrari. liner notes to *Petite symphonie intuitive pour un paysage de printemps*, BVHaast: BVH 9009 (CD), Released 1990.

¹⁵ Ibid.

¹⁶ Ibid.

¹⁷ 前掲メールによる。

上、《コース・メジャン》との接点については、前述のガイユー編書[3]のカタログページとプレスク・リヤン協会が作成した冊子のみで多少触れられているに留まるが、《コース・メジャン》と《春景色》が切り離せない間柄にあることは十分に理解できた。作品名にある「春景色」とはフェラーリがメジャンで見聞きした春の景色であり、「小交響曲」とはそこで出会った孤独な羊飼いが余暇に嗜むフルートにフェラーリが重ねたアンサンブルなのであろう。勿論《春景色》で実際にアヴェスクが演奏している訳ではない筈だが、フェラーリが描いたメジャンの春景色に佇むのは笛を吹く羊飼いであり、映画《コース・メジャン》においてはその音楽《春景色》とそして羊飼いとが、暗暗裡に3人目の主人公であると言えるのかもしれない。(図3)18



図3.《コース・メジャン》の一場面(羊飼いアヴェスク)

5. おわりに

フェラーリの活動を論じる上で最も重要な要素の一つと筆者が考えている《ほとんど何もない》作品群に含まれる映画《ほとんど何もないあるいは生きる欲望第一部:コース・メジャン》を取り上げ、彼の映画と映画音楽を通じた表現の一端を検証する試みを行った。分析も不十分で未だ煩雑な考察に留まるが、作曲家フェラーリの創作の中であえて映画を掬い上げることの意義は確認できた。今回触れることのなかった第二部《ラルザック高原 Le Plateau du Larzac》では、フェラーリが作詞も手掛けたという贋民俗歌謡のような音楽を聞け、また興味深い。《第二部》とその音楽についても今後解析していくこととする。

6. 参考文献

- [1] 渡邊愛「逸話的音楽をめぐってリュック・フェラー リ作曲《パリー東京ーパリ》を題材に」、『東京藝術 大学 音楽文化学論集』第 3 号、65-75 頁、2013 年
- [2] ジャクリーヌ・コー『リュック・フェラーリとほとんど何もない インタヴューリュック・フェラーリのテクストと想像上の自伝』(Jacqueline Caux. Presque rien avec Luc Ferrari. Nice: Main d'œuvre, 2002) 椎名亮輔 訳、東京:現代思潮新社、2006 年
- [3] Evelyne Gayou. ed. *Portrait polychrome: Luc Fer-rari*. Paris: Ina-GRM, 2001.

7. 著者プロフィール

佐藤亜矢子 (Ayako SATO)

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程在籍。主に電子音響音楽の作曲と研究を行う。FUTURA、WOCMAT、NYCEMF、SMC、ICMC、ISSTC、ISMIR等の国際学会や音楽祭で作品上演。CCMC2012 佳作、International Electroacoustic Music Young Composers Awards 2012 第三位、2013 佳作(台湾)、Destellos Competition 2013 佳作(アルゼンチン)、Prix Presque Rien 2013 第三位(フランス)、東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞受賞。日本電子音楽協会、先端芸術音楽創作学会、ICMA会員。

¹⁸ 2014 年 10 月 23 日プレスク・リヤン協会日本支局ブログ http://association-presquerien.hatenablog.com/entry/2014/10/23/ 093819 2015 年 2 月 23 日アクセス